言葉の狩り場[1)]

― ジュール・ヴェルヌ「狩りの 10 時間」と『フィガロ』―

三　枝　大　修

ジュール・ヴェルヌ (Jules Verne, 1828-1905) に「狩りの 10 時間」[2)]という短篇がある。

1859 年の夏の終わりのある日，語り手の「私」が狩猟好きの友人ブレティニョに誘われてアミアン近郊の狩猟場へと赴き，何人かのベテラン狩猟家と一緒に狩りをするのだが，想定外の不猟に見舞われたうえ，ヘマばかりやらかして散々な一日を過ごす――というコミカルな物語である。

構想・執筆は 1881 年の 4 月頃から 12 月頃にかけて。同年 12 月 18 日に，アミアン・アカデミーの公開講演の場で作者本人によって朗読されている。活字媒体での初出は 1881 年 12 月 19 日・20 日付の『アミアン新聞』。原稿はさらに翌年刊行の『アミアン・アカデミー紀要』に掲載され[3)]，一定程度の改稿を経たあと，エッツェル社の単行本『緑の光線』の巻末に収められる[4)]。

---

1)　本稿では，フランス語文献の引用にはすべて拙訳を用いる。

2)　邦訳は以下。ジュール・ヴェルヌ「狩りの十時間――ただの小咄」三枝大修訳，『成城大学　経済研究』第 233 号，2021 年 7 月，135-166 頁（底本は下記註 4 に掲げられているテクスト）。

3)　Jules Verne, « Dix heures en chasse. Simple boutade », *Mémoires de l'Académie des Sciences, des Lettres et des Arts d'Amiens*, année 1881, 3e série, tome VIII, 1882, p. 193-218.

4)　Jules Verne, « Dix heures en chasse. Simple boutade », *Le Rayon-vert* suivi de *Dix heures en chasse*, Paris, J. Hetzel, coll. « Bibliothèque d'éducation et de récréation », 1882, p. 271-306. 本稿における「狩りの 10 時間」の引用はすべてこのテクストから行う。書誌情報は註においては「DHC」と略記し，その直後に参照箇所の頁番号のみを示す。

ヴェルヌの小説連作〈驚異の旅〉の中では比較的マイナーな部類に入る作品だが，今回，この短篇の材源の一つと見なし得るテクストを発見することができたので，本稿ではその報告を行う。すなわち，フランスの日刊紙『フィガロ』の 1881 年 9 月 3 日付「文芸付録」[5]である。以下，まずは第 1 章で「狩りの 10 時間」が書かれたコンテクストを整理し，続く第 2 章・第 3 章で『フィガロ』のテクストとヴェルヌのテクストの対照作業を行って，前者が後者の材源であったことを示す。

1. コンテクスト――「狩りの 10 時間」が書かれた経緯

「狩りの 10 時間」はなぜ書かれたのか。あるいは，なぜ書かれなければならなかったのか。ヴェルヌと編集者エッツェルの往復書簡を参照しつつ，この作品が制作されることになった経緯を整理していこう。

「狩りの 10 時間」の発表から遡ること約 8 か月，1881 年春の時点でエッツェル社の『教育娯楽雑誌』に連載されていたヴェルヌの作品は『ジャンガダ』であった。単行本としては全 2 巻で刊行予定だったこの長篇，第 1 巻はその年の 6 月に出ることになるのだが，続く第 2 巻の分量が不足している，ということがエッツェルからヴェルヌに伝えられる。

> 『ジャンガダ』の巻が最低限の分量に達するためには追加分が要るわけだが，何を使うつもりなのかね？　この巻を台無しにすることのない，それ自体として出来映えのよいものが欲しいところだが[6]。

5）　*Le Figaro. Supplément littéraire*, 3 septembre 1881, 4 p. 以下，本稿の註においてこの文献を参照する場合には書誌情報は「*F81*」と略記し，その直後に参照箇所の頁番号と段 (colonne) の番号のみを記す。

6）　*Correspondance inédite de Jules Verne et de Pierre-Jules Hetzel (1863-1886)*, établie par Olivier Dumas, Piero Gondolo della Riva et Volker Dehs, Genève, Slatkine, t. III, 2002, p. 103.

エッツェルのこの手紙の日付は4月23日だが，ヴェルヌは4月25日付の返信でこう答えている。

> 『ジャンガダ』の巻の不足部分を補うために，愉快な短篇を書くつもりです[7]。

しかし，この「愉快な短篇」の執筆は順調には進まない。次にこの作品の話題が往復書簡の文面に浮上してくるのは8月9日のことなのだが，暑さが苦手で体調を崩しているヴェルヌは手紙の中で次のようにこぼしている。

> 猛暑が応え，体調を戻すのに大いに苦労しています。おかげでほとんど仕事ができず，結局，例の短篇の材料も何も見つかっていません。『ジャンガダ』第2巻の長さは足りていると思いこんでいたので，こんな分量の短篇を書く準備はまったくできていなかったのです。それに，ご存じのとおり，私は即興が得意ではありませんし，一つの主題について時間をかけて考えてからでなければ，そこから特別なものを引き出してくることはできません。ですから，この巻の最後の部分については困り果てています[8]。

この手紙に対するエッツェルの8月10日付の返事を参照すると，ここで「こんな分量」と言われているのは「八折判で60ページ分」[9]であったということが分かる。短篇とはいえ，たしかにそれなりの長さである。先ほども引用した8月9日付書簡の末尾付近には，こんな文言も読まれる。

7） *Ibid*., p. 104. 強調はヴェルヌ。
8） *Ibid*., p. 113.
9） *Ibid*., p. 116.

短篇については何もできていませんし，私が考えていたのは狩りの物語なのですが，うまくいっていません。以前書いた未発表の短篇の中にも適当なものは何も見つからず，もし弟の書いたその物語でよいと言ってくださるのであれば，そんなかたちで窮地から抜け出せたのはじつに幸運なことだった，ということになるでしょう[10)]。

構想中の短篇の主題が「狩り」であるということが明かされている重要な一節である。だが結局，『ジャンガダ』第 2 巻の刊行（1881 年 11 月）に間に合うようなペースではこの短篇の制作は捗らず，結果的に不足部分を補うことになるのは上の引用文中でも話題になっている弟の紀行文，すなわちポール・ヴェルヌ (Paul Verne, 1829-1897) の「蒸気船サン＝ミシェル号に乗ってロッテルダムからコペンハーゲンへ」であった。

ならば，「狩りの物語」はどうなったのか。1881 年 4 月および 8 月の書簡の中で言及されている「短篇」が同年の暮れに「狩りの 10 時間」として具現化し，アミアン・アカデミーにおける朗読というかたちで披露されたという事実をわれわれは知っている。ということは，『ジャンガダ』第 2 巻の刊行にこそ間に合わなかったものの，ヴェルヌはこの短篇を 1881 年中にはきちんと完成まで導いていたわけである。ならば――ここから先は本稿における仮説になるが――その制作の大きな助けになったものの一つが，『フィガロ』紙の 1881 年 9 月 3 日付「文芸付録」だったのではあるまいか。当時，この日刊紙は毎週土曜日に全 4 ページ――とはいえ 4 ページ目は基本的に広告欄なので，実質的には 3 ページ――の文芸付録を付けていたのだが，9 月 3 日付のものは，何ともタイミングのよいことに，「狩猟」の特集号だったのである。「狩りの物語」の材料をそろえるのに呻吟していたその時期のヴェルヌにとってはまさしく渡りに舟であったと言

10）　*Ibid*., p. 114.

えよう。1897 年とやや時代が隔たったものではあるが，晩年のヴェルヌにインタビューを行ったアドルフ・ブリソンによる以下の証言に垣間見えるように，『フィガロ』を含む新聞数紙を日課のようにして読んでいたというアミアン在住の小説家が，狩猟ネタの宝庫であるこの特集に飛びついたであろうことは想像に難くない。

> 彼〔ヴェルヌ〕は早朝に目覚めて 11 時まで仕事をし，昼食をとってから産業協会の本部に赴くのだが，そこには読書サロンが整備されている。彼はそこで新聞雑誌に目を通し，『タン』の次に『フィガロ』，『フィガロ』の次に『ゴロワ』という具合に，いつもなるべく同じ順番で読んでいく[11)]。

かくして折よく恰好の材料を手に入れたヴェルヌは，それをふんだんに活用しながら「愉快な短篇」を，すなわち「狩りの 10 時間」を書いていくのである。

次章以降，われわれはヴェルヌがこの材料の中から何を選び取り，それをどのように加工していったのかをテクストに即して検証していく。

2. 『フィガロ』の 1881 年 9 月 3 日付「文芸付録」から「狩りの 10 時間」へ

まずは『フィガロ』の 1881 年 9 月 3 日付「文芸付録」（以下，『F81』と略記）の概要を整理しておこう。1881 年当時の『フィガロ』の文芸付録は本体である日刊紙と同様に一部が 4 ページからなり――ただし，先述のように 4 ページ目は広告用スペース――各ページは六つの「段 (colonne)」に分かれていた。9 月 3 日付のものについて言えば，最初のページにまず編

11） Adolphe Brisson, « Promenades et visites — M. Jules Verne », *Le Temps*, 29 décembre 1897, p. 2.

集部による短い序言があり，続いてシェルヴィル侯爵の記事「狩猟と狩猟家たち」[12]が，さらに筆名「レトリバー」による記事「狩猟家たちの肖像画集（ギャラリー）」[13]が置かれている。後者はナポレオン1世，ナポレオン3世，ウジェーヌ・シュー，アレクサンドル・デュマ父子，ガンベッタ，クレマンソーなど，19世紀フランスの著名人12名と狩猟との関わりを紹介したものである。続く2ページ目と3ページ目は「フィガロの狩猟歳時記」[14]と題されており，見開き2ページで合計12個並ぶ段のそれぞれに1月から12月までの12か月が振り当てられている。各段の内容はいかにも歳時記らしく，月ごとの狩猟家たちへの助言やその月に獲れるジビエを使った料理のレシピなど，いわゆる「お役立ち情報」である。

以下，本章ではこの『F81』のテクストから「狩りの10時間」へと言葉が移植されているケースを11個見ていく。

1）大規模な引き写し（4例）

ヴェルヌが参照し，着目し，自作に引き写したと推定される箇所は『F81』のいずれのページにも見つかるのだが，「狩りの10時間」との相互テクスト性が最も顕著に見てとれるのは「フィガロの狩猟歳時記」の「9月」の段である（これはおそらくヴェルヌの短篇がちょうどその時期――正確な日付は明かされていないが，8月末か9月初め――の一日を描いた物語であることに起因している）。したがって，本節ではまずこの「9月」の段から比較的大規模に語や語句の引き写しが行われている例を三つ取りあげる。ついで，4番目として，ヴェルヌが『F81』の中の複数の箇所から少しずつ言葉を切り抜き，それらを自作の中で一文に貼り付けて提示しているという特殊な例を紹介する。

12）Gaspard de Cherville, « La chasse et les chasseurs », *F81*, p. 1, col. 1-3.
13）Retriever, « Galerie de chasseurs », *F81*, p. 1, col. 3-6.
14）Florian Pharaon, « Calendrier cynégétique du Figaro », *F81*, p. 2-3.

①出発の朝の情景

狩猟家たちが狩りに出発する朝の情景である。『F81』では狩猟経験の乏しい「若者たち」と経験豊富な「老練家たち」の行動のコントラストを以下のように記述している。

> 前者〔若者たち〕は気忙しいが経験不足であり，夜が白むやいなや出発する。――老練家たちは抜け目なく，陽気に腹ごしらえをしながら8時の鐘が鳴るのを待つ。彼らは知っているのだ，翼が濡れているヤマウズラは切り株畑の中でじっとしているわけではないし，5，6回飛び立たせることはできたとしても，うまく近づける見込みのあるムラサキウマゴヤシやクローバーやイガマメの茂みに戻ろうとしてくれるわけではないのだと。／鳥たちの羽が乾き，草の上にきらきらと輝く小さなしずくを太陽が吸いとってくれてから，彼らは出発するのである[15)]。

次に引用するのは「狩りの10時間」第4章，こちらも狩猟家たちの朝の様子を描いた一節である。一読するや，『F81』の「若者たち」がここでは狩りの初心者である語り手（「私」）に，「老練家たち」がその語り手の仲間である狩猟家たち（「その道の達人たち」）に置き換えられていること

15） 原文：« Les premiers, impatients mais inexpérimentés, partent dès l'aube. – Les vieux routiers, les malins, attendent, en lestant joyeusement leur estomac, le coup de huit heures : ils savent que la perdrix, dont l'aile est humide, ne tient pas dans les chaumes et qu'on peut la lever cinq ou six fois sans la décider à se remettre dans les couverts, luzerne, trèfle ou sainfoin, où l'on pourrait avoir l'espoir de l'approcher. / Lorsque le plumage des oiseaux est ressuyé et que le soleil a pompé les gouttelettes qui scintillent sur tous les brins d'herbe, ils partent. » (*F81*, p. 3, col. 3.)「狩りの10時間」のテクストと『フィガロ』のテクストの双方に共通して現れる語や語句（つまり，ヴェルヌが引き写したと推定される語や語句）を下線で強調しておく。また，原典において改行が行われている箇所を，引用文中ではスラッシュで示す。以下同様。

が分かるだろう。

> 夜が白むやいなや，食事さえとらずに出発したがる経験不足の狩猟家のように，私は原っぱに出ていきたくてたまりませんでした。ですが，その道の達人たちは〔…〕初心者ならではの私の気忙しさをぶつくさ言いながらたしなめたのでした。抜け目ない彼らは知っていたのです，夜が明けるころのヤマウズラの若鳥は翼がまだ朝露に濡れていて近づくのは至難の業だし，たとえ飛び立ったとしても，自分から茂みに戻ろうとはしないものなのだと。／というわけで，暁の涙を太陽が飲み干してしまうのを待たねばなりませんでした[16]。

引用文中では下線で強調しておいたが，「フィガロの狩猟歳時記」の文章で使われているのと同じ語や語句――「経験不足の (inexpérimenté)」，「夜が白むやいなや (dès l'aube)」，「出発する (partir)」，「抜け目ない (malin)」，「待つ (attendre)」，「彼らは知っている (ils savent [savaient])」，「翼 (aile)」，「濡れている (humide)」，「近づく (approcher)」，「太陽 (soleil)」，「茂みに戻ろうとする (décider à se remettre dans les couverts)」――がヴェルヌのテクストでもおびただしく使用されている[17]。形容詞「気忙しい (impatient)」から名詞

16）原文：« J'avais hâte d'être en plaine, comme ces chasseurs inexpérimentés, qui veulent partir dès l'aube, même avant d'avoir mangé. Mais les maîtres de l'art [...] calmèrent en bougonnant mes impatiences de néophyte. Ils savaient, les malins, qu'au jour naissant le perdreau, dont les ailes sont encore humides de rosée, est très difficile à approcher, et que, s'il s'envole, il ne se décide pas volontiers à se remettre dans les couverts. / Il fallut donc attendre que toutes les larmes de l'aurore eussent été bues par le soleil. » (DHC, p. 280-281.)

17）これらに加えて，『F81』のテクストに見られる「ムラサキウマゴヤシやクローバーやイガマメ」という 3 種類の植物の列挙も「狩りの 10 時間」の別の箇所に――列挙の順番のみを入れ替えて――移植されている：「犬たちは鼻を地面に向け，ムラサキウマゴヤシやイガマメやクローバーの中に分け入って，小刻みに走りながら獲物を探していました」。原文：« leurs chiens, qui, le nez bas, quêtaient au petit trot dans les luzernes, les sainfoins, les trèfles » (DHC, p. 282-283.)

「気忙しさ (impatience)」への品詞の転換，「ヤマウズラ (perdrix)」から「ヤマウズラの若鳥 (perdreau)」への言い換えのように，加えられている修正がごく軽微なものも引き写しの範疇に入れておいていいだろう。

一方で，言葉をそのまま移植するのではなく，類義のものに差し換えてはいるが，実質的には同じ事物や出来事を指す，というケースもいくつか見受けられる。ごく単純な例で言えば，朝露は「きらきらと輝く小さなしずく (gouttelettes qui scintillent)」から「暁の涙 (larmes de l'aurore)」へと，そしてそれを蒸発させる太陽の営為は「吸いとる (pomper)」から「飲む (boire)」へと，それぞれ表現だけが換えられているし，獲物のヤマウズラを狩り出す行為も，「〔鳥を〕飛び立たせる (lever)」から「〔鳥が〕飛び立つ (s'envoler)」へと，使用されている動詞に変化が認められる。あとは，朝食をめぐる記述にも注目しておきたい。「狩りの 10 時間」と「狩猟歳時記」とで用いられている表現は異なるが，「経験不足の狩猟家＝食事をとらずに出発したがる」という図式そのものは『F81』からヴェルヌの短篇へと無傷のまま保存され，引き継がれているのである。

以上の対照作業の結果から，「狩猟歳時記」に描かれている狩りへの出発の情景をヴェルヌが――登場人物だけは入れ替えて――ほぼそのまま借用していることは明らかだろう。

②狩猟服の描写

二つ目の事例は狩猟用の衣服，特に履物についてである。「狩猟歳時記」の「9 月」の段には狩猟家のためのこんな助言が記されている。

> 狩猟家は履物に細心の注意を払わねばならない。麻や綿では足が切れたりマメだらけになったりするので，解禁日にもウールの靴下は必須である。編み上げ靴は腕のいい職人に作ってもらったもの，つまり革が柔らかくて靴底が少なくとも 4 ミリは甲革をはみ出しているものが

要る。さらに，亜麻布の脚当てだ[18]。

ヴェルヌはこの文章を切り貼りして自作の登場人物たちの描写をこしらえているように見える。狩りの初心者であるがゆえに装備の貧弱な語り手が，仲間たちの服装をまぶしげに見つめるシーンである。

狩猟服に身を包んだ彼ら，プロの狩猟家たちはなんと立派に見えたことでしょう――白の上着，ゆったりとしたコーデュロイのズボン，靴底が甲革をはみ出している幅広のスパイク靴，すぐにかすり傷をつくってしまう麻や綿の靴下よりも好ましい，ウールの靴下を上から覆っている亜麻布の脚当て[19]。

二つのテクストの共通項を整理しておこう。「足が切れたりマメだらけになったりする」――ヴェルヌの表現で言えば「かすり傷をつくってしまう」――「麻 (fil)」や「綿 (coton)」の靴下を避け，代わりに着用すべき「ウールの靴下 (bas de laine)」。「靴底 (semelle)」が「甲革 (empeigne)」を「はみ出す (déborder)」ような頑丈な狩猟靴。そして，「亜麻布の脚当て (jambières de toile)」。「狩猟歳時記」の著者が勧めるこれらの履物を，「狩りの 10 時間」ではすべて語り手ではなくその仲間たちが身に着けている。アミアン在住のベテランハンターたちはなんとも忠実に『フィガロ』の忠

18）原文：« Le chasseur doit donner tous ses soins à sa chaussure : le bas de laine est de rigueur, même à l'ouverture, fil ou coton coupant les pieds ou les couvrant d'ampoules. Les brodequins doivent être l'œuvre d'un bon ouvrier : cuir souple et la semelle débordant d'au moins quatre millimètres sur l'empeigne ; jambières de toile. » (*F81*, p. 3, col. 3.)

19）原文：« Qu'ils étaient superbes à voir, ces chasseurs de profession, dans leur tenue de chasse, veste blanche, ample pantalon de velours à côtes, larges souliers à clous dont la semelle débordait l'empeigne, jambières de toile recouvrant le bas de laine, préférable au bas de fil ou de coton, qui ne tarde pas à produire des écorchures » (DHC, p. 283-284.)

告に従っているわけである。

③狩猟鳥獣の列挙

いま見てきた事例②でもヴェルヌは「狩猟歳時記」からさまざまな言葉を拾い集め，それで狩猟用衣服の列挙を作りあげていたが，列挙の頻用というのはそもそもこの小説家の文体上の特徴の一つであり，『F81』に出てくる語や語句をパッチワークして「狩りの 10 時間」の中で何らかの列挙に仕立てあげている例はほかにもいくつか見つかる。

例えば「狩猟歳時記」の「9 月」の段，以下の一節に挙げられている鳥獣の名前がヴェルヌの作品では列挙の一文へと流しこまれていく様子に注目していただきたい。

> 9 月には獣毛部隊も羽毛部隊も勢ぞろいだ。／ヤマウズラがいる。ウズラやウズラクイナが木蔭に住みつく。／野ウサギの軍勢には新兵がほとんどいない。1 月生まれの野ウサギは若ウサギとなり，古参の連中を上回る。種の精華を体現しているのだ。子ウサギの大半もそこそこ見栄えがするようになる。雌の野ウサギの死だけは後悔の種になるかもしれない。9 月には子どもを孕んでいるもの，哺乳中のものが多いからだ。そのため，鳥獣の保護に熱心な地域では，この動物は 10 月にならなければ撃ってはいけないのである[20]。

↓

20） 原文：« En septembre, le contingent du poil et de la plume est au complet. / La perdrix est là. Les cailles, les râles de genêts peuplent les couverts. / L'effectif des lièvres présente peu de conscrits. Ceux de la portée de janvier, devenus *trois-quarts*, dament le pion à leurs anciens ; ils représentent la fleur des pois de l'espèce ; la majorité des levrauts est présentable ; la mort des hases peut seule devenir un remords : beaucoup sont pleines ou allaitent en septembre. C'est pour cela que, dans les pays conservateurs leur tir n'est autorisé qu'en octobre. » (*F81*, p. 3, col. 3.) イタリック（訳文では傍点）による強調は原著者。

ところで，獲物はといえば，何も見当たりませんでした。ですが，この専用の狩り場にウズラが，ヤマウズラが，ウズラクイナが，それからわが仲間たちが「若ウサギ」と呼び，さんざん話題にしている 1 月の野ウサギが，それから子ウサギが，さらには雌の野ウサギが，わんさかいることは信じなくてはなりません，なにしろ彼ら〔狩猟家たち〕がそう断言しているのですから。／「でもね」とわが友ブレティニョは言っていました。「子どもを孕んでいる雌の野ウサギは撃っちゃだめだよ！　そんなのは，狩猟家にあるまじきことだ！」[21)]

ヴェルヌがこの一節を書くにあたって「狩猟歳時記」の文章を下敷きにしていることは明らかだろう。「狩りの 10 時間」の作者は引用箇所の前半においては『F81』から借りてきた鳥獣の名前を列挙に用い，後半においては「雌の野ウサギ」に関して得られた情報を巧みにブレティニョの台詞の中に織りこんでいる。特に前半の列挙に関しては，狩猟用語である「若ウサギ (trois-quarts)」[22)]のような特殊なものも含めて『F81』に挙げられているジビエの名前――「ヤマウズラ (perdrix / perdreau)」，「ウズラ (caille)」，「ウズラクイナ (râle de genêts)」，「子ウサギ (levraut)」，「野ウサギ (lièvre)」，「雌の野ウサギ (hase)」――を一つ残らず自らのテクストに移植しており，しかもそれらを引用元のテクストとは異なって一文に詰めこんでいるあたりがいかにもヴェルヌらしい。一方で，その列挙のあとの後半部においても――二つのテクストの双方に共通して使用されている語は「子どもを孕

21）原文：« Par exemple, en fait de gibier, je ne voyais rien. Cependant, que sur cette réserve il y eût en quantité des cailles, des perdreaux, des râles de genêt, puis de ces lièvres de janvier que mes compagnons appelaient des « trois-quarts » et dont ils avaient la bouche pleine, puis des levreaux, puis des hases, il fallait le croire, puisqu'ils l'affirmaient. / « Et même, m'avait dit l'ami Brétignot, évitez de tirer les hases pleines ! C'est indigne d'un chasseur ! » » (DHC, p. 284.)

22）「trois-quarts」は「4 分の 3」の意だが，狩猟用語としては「ほぼ成獣になった子ウサギ」を指す。

んでいる (pleine)」くらいだが――妊娠中の雌の野ウサギは鳥獣保護の観点から撃ってはいけない，という情報をヴェルヌが『F81』から抽出して自作に取りこんでいることは疑いようもない。

④狩猟家の列挙

ここでいったん「狩猟歳時記」の「9 月」の段を離れ，『F81』の紙面では必ずしも近接して現れていたわけではない複数の言葉がヴェルヌのテクストでは一か所にまとめられ，列挙を形作っている，という事例を見てみよう。今回は「狩りの 10 時間」の方を先に読んでおきたい。第 2 章に見られる，さまざまな腕前の狩猟家たちの列挙である。

> プロのスポーツマン，「功成り名遂げたつもりでいる」連中も，三流，四流の射撃手たちも，狙いをつけても仕留められたためしのない不器用な連中と同程度には狙いをつけずとも仕留められる器用な連中も，さらには一流どころの(ディ・プリモ・カルテッロ)狩猟家に負けないくらい「精勤な」下手っぴ(マゼット)どもも，この解禁日を目指して準備し〔…〕[23]

例によってやや詰めこみすぎの感のある列挙だが，下線部の表現の一つ一つが『F81』のどこかから取られてきている。例えば「スポーツマン (sportsmen)」と「射撃手たち (tireurs)」については――「一流」か，「三流，四流」か，という違いはあるにせよ――『F81』の最初のページの以下の一節だ。

23） 原文：« Les sportsmen du métier, ceux qui « croient que c’est arrivé », tout comme les tireurs de troisième et de quatrième ordre, les adroits qui tuent aussi bien sans viser que les maladroits qui visent sans jamais tuer, enfin les mazettes non moins « diligents » que les chasseurs *di primo cartello*, se préparaient en vue de cette ouverture » (DHC, p. 273.)

この部隊には選り抜きのスポーツマン，苦難をものともしない健脚家，一流の射撃手たちがいるのだが，にわか仕込みの狩猟家も大勢いる[24)]。

また，「功成り名遂げたつもりでいる (qui croit que c'est arrivé)」という慣用句も『F81』の最初のページの以下の二か所で用いられている。

自信満々の狩猟家，あるいは，大通り（ブールヴァール）のもっと生彩に富んだ言葉で言えば，「功成り名遂げたつもりでいる狩猟家」という種類の人々だけは除いて〔…〕[25)]

「功成り名遂げたつもりでいる狩猟家」を正当に評価してやらねばならない。彼は厳格なやり方で自らの計画を実行しているのだ[26)]。

さらに，「一流どころの (*di primo cartello*)」というイタリア語由来の表現もまた同じページの以下の一節に見つかる。

弁護士のジュール・グレヴィ氏はつねにいちばん熱心な者の内の一人だったので，手練れの狩猟家，かつ一流どころの（ディ・プリモ・カルテッロ）射撃手であるという評判がほぼ半世紀前からジュラ県では確立されている[27)]。

24）原文：« Il se trouve dans cette armée des sportsmen d'élite, marcheurs intrépides, tireurs de premier ordre, tout comme de nombreux chasseurs d'occasion. » (*F81*, p. 1, col. 2.)

25）原文：« hors une seule variété, et ce n'est point la moins originale, celle du chasseur convaincu ou, pour parler la langue plus expressive des boulevards, du « chasseur qui croit que c'est arrivé ». » (*F81*, p. 1, col. 2.)

26）原文：« Il faut rendre cette justice au « chasseur qui croit que c'est arrivé », il exécute rigoureusement son programme. » (*F81*, p. 1, col. 2.)

27）原文：« M. Jules Grévy, avocat, a toujours été un des plus ardents et, depuis tantôt un demi-siècle, sa réputation de chasseur émérite et de tireur *di primo cartello* est établie dans le Jura. » (*F81*, p. 1, col. 6.)

最後に，文脈の都合上「下手っぴ」と訳しておいた「mazette」だが，この語は元来は「駄馬」を指し，『F81』では射撃の下手なナポレオン・ボナパルトを形容するために用いられていた。

> 騎兵としての彼〔ナポレオン一世〕はつねに博労業界で言うところの荒馬乗りだったが，射撃手としては正真正銘の駄馬（マゼット）だった[28]。

「狩りの 10 時間」の作者はこのようにして『F81』のさまざまな箇所から使えそうな表現――傾向としては，一風変わったもの，特徴豊かなものが多い――を拾いあげ，それを畳みかけるような列挙に仕立てて自作の中に埋めこんでいるのである。

2）小規模な引き写し（7 例）

ここまでは比較的大規模な引き写しの例を四つ見てきたが，ここからは小規模なものを七つ，ささやかな参考資料として挙げていく。ヴェルヌが借用したと思しき語や語句が『F81』のテクストに出現するその順序に従って事例を並べ，それぞれに通し番号（⑤～⑪）を付す。

⑤「野蛮な気晴らし (divertissement barbare)」という「プリュドム (Prudhomme)」氏の言葉への言及

> 狩猟を「野蛮な気晴らし」と呼ぶプリュドム氏も，「暇人の暇つぶし」呼ばわりする無関心な人々も，狩りの当事者たちにとって解禁日が持ち得る重要性についてはほとんど想像もできない[29]。

28） 原文：« Comme cavalier, il fut toujours ce qu’en style de maquignonnage on appelle un casse-cou, et comme tireur une véritable mazette. » (*F81*, p. 1, col. 3.)

29） 原文：« M. Prudhomme, qui qualifie la chasse de « divertissement barbare », les indifférents qui la traitent de « passe-temps de désœuvrés », ne soupçonnent guère

↓

その日が来れば，あの不滅のジョゼフ・プリュドムが「野蛮な気晴らし」と呼んでもよかろうと考えたことの熱烈な愛好者たちは，名声を手にすることができるのです！[30)]

⑥「六週間前から (depuis six semaines)」解禁日を心待ちにしている狩猟家たちの描写

六週間前から，その人たち〔狩猟愛好家〕のおしゃべりにはもうヤマウズラの若鳥のことしか話題として認められておらず〔…〕[31)]

↓

少なくとも六週間前から，この派手に祝われるべき一日〔解禁日〕は皆に心待ちにされていたのでした[32)]。

⑦狩りのことしか考えられなくなってしまった狩猟家たちの描写（狩猟家の眼中に無いものの列挙の中に「文学 (littérature)」と「政治 (politique)」が含まれている）

彼〔狩猟愛好家〕にとっては狩り以外のすべてが存在をやめていた。

---

l'importance que le jour de l'ouverture peut affecter aux yeux des intéressés. » (*F81*, p. 1, col. 2.) なお，「プリュドム氏」はフランスの俳優・作家・画家アンリ・モニエ (Henri Monnier, 1799-1877) が創造した人物であり，俗物ブルジョワの典型として知名度が高かった。

30） 原文：« ce grand jour, dans lequel allaient s'illustrer les fanatiques de ce que l'immortel Joseph Prudhomme a cru pouvoir appeler un « divertissement barbare ! » » (DHC, p. 273.)

31） 原文：« depuis six semaines, les conversations de ces gens-là n'admettent plus d'autre thème que la question du perdreau [...] » (*F81*, p. 1, col. 2.)

32） 原文：« depuis six semaines, à tout le moins, cette date solennelle était impatiemment attendue. » (DHC, p. 272-273.)

美術，文学，科学，政治，そんなくだらないことには――自分の銃が耕作地に吐き出したばかりの黒ずんだぐしゃぐしゃのおくり〔火薬を固定するための詰め物〕を気に留めないのと同様に――見向きもしない[33]。

↓

考えることといえばウズラのことばかり，話すことといえば野ウサギのことばかり，夢はといえばヤマウズラを手に入れることばかりでした！　妻も，子供も，家族も，友人も，すべては忘却の彼方！　政治も，芸術も，文学も，農業も，商業も，万事がこの大切な一日への強い関心を前に消え去っていました[34]。

⑧「長身 (grand)」かつ「痩躯 (sec)」であるという狩猟家の体格の描写

長身，痩躯，骨ばってはいるが〔…〕並々ならぬ訓練のおかげで力強さもあり，どんな悪天候をもものともしない彼〔狩猟愛好家〕は，毎朝，夜の明けきらぬ内から出発する[35]。

↓

まずはマクシモン，長身痩躯の男で，普段はこのうえなく温和なのですが，猟銃を小脇に抱えた途端，狂暴になります[36]。

33）原文：« pour lui, en dehors de la chasse, tout a cessé d’exister. Beaux-arts, littérature, sciences, politique, il ne se soucie pas plus de ces fariboles que de la bourre déchiquetée et noircie que son fusil vient de cracher sur le guéret. » (*F81*, p. 1, col. 2.)

34）原文：« ne pensant que pour penser caille, ne parlant que pour parler lièvre, ne rêvant que pour rêver perdreaux ! Femme, enfants, famille, amis, tout était oublié ! Politique, art, littérature, agriculture, commerce, tout s’effaçait devant les préoccupations de ce grand jour » (DHC, p. 273.)

35）原文：« Grand, sec, osseux, [...] ayant aussi la vigueur que procure un entraînement excessif, parfaitement insensible à toutes les intempéries, il part tous les matins avant le jour » (*F81*, p. 1, col. 3.)

36）原文：« Ce fut d’abord à Maximon, un grand sec, le plus doux des hommes dans les

⑨「大通り (boulevard)」,「アスファルト (asphalte)」という二語の同一文中での使用

大通りの空気を吸い，アスファルトを踏みしめることが彼〔狩猟家〕の望みだ[37]。

↓

私には大通りのアスファルトの方がはるかに好ましいのです[38]。

⑩「自分の豪傑ぶりを物語る (raconter ses prouesses)」という表現の使用

彼〔狩猟家〕は念入りに自分の豪傑ぶりを物語り，狩りの様子について，冒した危険について，大勝利や大失敗について話す[39]。

↓

〔狩猟家が嫌われるのは〕むしろこの狩猟家という人々が，時宜を得るごとに，また時宜を得ていないときですら，あまりにも嬉々として自分の豪傑ぶりを物語るからではないでしょうか？[40]

⑪ウサギの白ワイン煮込みを指す「ジブロット (gibelotte)」という料理名への言及

ジブロットを作るときのようにウサギの肉をぶつ切りにし，ブイヨン

---

conditions ordinaires de la vie, mais féroce dès qu'il avait un fusil sous le bras » (DHC, p. 277.)

37）原文：« il veut respirer l'air du boulevard, fouler l'asphalte » (*F81*, p. 2, col. 6.)

38）原文：« je préfère de beaucoup l'asphalte des boulevards. » (DHC, p. 290.)

39）原文：« il raconte amoureusement ses prouesses, il parle de ses chasses, des dangers courus, des triomphes et des déboires » (*F81*, p. 2, col 6.)

40）原文：« Ne serait-ce pas plutôt parce que lesdits chasseurs racontent trop volontiers, à tout propos, et hors de propos, leurs prouesses ? » (DHC, p. 271.)

に入れて煮込んでください[41]。

↓

〔雌の野ウサギが〕孕んでいるか，いないかなんて，私には分かるわけがありません。まだようやくウサギを野良猫から見分けられるかどうか，といったところなのですから――ジブロットになっていたとしても！[42]

以上 11 個の事例から，本章ではヴェルヌが『F81』を参照し，そこに使えそうな語や語句が見つかれば躊躇なくそれを自作に取りこんでいたこと，しかも合計すればそれがかなりの数にのぼることを示すことができたのではないかと思う。狩猟の比喩で言うならば，『F81』の紙面はこの小説家にとっては有用な言葉の狩り場，アイディアの狩り場だったのである。

3.『フィガロ』の 1880 年 9 月 5 日付「文芸付録」から「狩りの 10 時間」へ

ところで，「狩りの 10 時間」の材源の探索を行っているわれわれにとってはきわめて興味深い文章が『F81』の冒頭に置かれている。

狩猟をテーマにした昨年の挿絵入り付録が好評を博したため，今年もまた読者諸賢に新作をお届けしなければ，ということになった。私たちは 1880 年版よりも 1881 年版の方がさらに面白いものになるように心がけ，特に――前回と同じ枠組の中に留まりながらも――その冗長な繰り返しになってしまうことは避けるように努めた[43]。

41） 原文：« Coupez le lapin en morceaux comme pour une gibelotte : mettez-le cuire dans du bouillon. » (*F81*, p. 3, col. 2.)
42） 原文：« Pleines ou vides, du diable si je m’en serais aperçu, moi qui en suis encore à distinguer un lapin d’un chat de gouttière, – même en gibelotte ! » (DHC, p. 284.)
43） *F81*, p. 1, col. 1.

つまり，前章にて扱った『フィガロ』の狩猟特集号（『F81』）は，じつはその前年に刊行されていた狩猟特集号のいわば続篇だったのである。調べてみると，1881 年 9 月 3 日から遡ること約一年，『フィガロ』紙 1880 年 9 月 5 日付「日曜版文芸付録」[44]がたしかに狩猟特集を組んでいる。だとすれば，上の一節を目にしたヴェルヌが「狩りの物語」を書くためのさらなる材料を求めて『フィガロ』のバックナンバーを図書館，あるいは産業協会の読書サロンなどで探し，くだんの「日曜版文芸付録」を閲覧していた可能性が――そしてそれを「狩りの 10 時間」の執筆に活かしていた可能性が――出てくる。

そこで，1881 年版の狩猟特集号に続き，本章では 1880 年版の狩猟特集号（以下，『F80』と略記）と「狩りの 10 時間」とを比較してみることにする。すると，『F81』ほど多くはないにせよ，ヴェルヌが借用したのではないかと推測できる語や表現がやはり『F80』の中にも見つかる。注目すべき例を五つ，以下に挙げていこう。

①「狩りの 10 時間」第 1 章の最初の文

「狩りの 10 時間」第 1 章の最初の文――ということはつまり，この短篇のオープニングの一文――は『F80』の 2 ページ目の記事「狩猟家たちの横顔」[45]の書き出しの部分に酷似している。以下に引用するので比べてみていただきたい。

> 狩猟を嫌う人々もいる。例えば本紙の寄稿者カトレルだ。彼は確かにまちがっているのだが，いずれ意見を変えてくれるだろうと期待している[46]。

44）*Le Figaro. Supplément littéraire du dimanche*, 5 septembre 1880, 4 p. 以下，本稿の註においてこの文献を参照する場合には書誌情報は「*F80*」と略記し，その直後に参照箇所の頁番号と段の番号のみを記す。

45）La Rüe, « Quelques profils de chasseurs », *F80*, p. 2, col. 1-2.

↓

狩猟家を嫌う人々もおりますが，たぶんその人々が完全にまちがっているというわけでもないのです[47]。

いずれも最初に「狩猟 (chasse)」ないしは「狩猟家 (chasseur)」を「嫌う人々がいる (il y a des gens qui n'aiment pas [point])」と述べたうえで，その直後，そういった嗜好が「まちがっている (avoir tort)」かどうかを問題にしているという点が目を引く。偶然の一致とは考え難い符合である。

②「狩りの 10 時間」第 1 章の結び

「狩りの 10 時間」第 1 章は，すでに見た冒頭の一文のみならず，結びの部分もまた『F80』を参照して書かれている可能性が高い。『F80』の最初のページに掲載されているカトレル (Quatrelles, 1826-1893) の短篇小説「二人乗りの馬車に三人で――狩りの物語」[48]の導入部に見られるいくつかの語や語句を，ヴェルヌは以下のようにつぎはぎして使っているように見える。

これからみなさんに私の物語をお話ししよう。願わくばこれが教訓話として役に立ってくれるといいのだが[49]。

＋

われわれは揃いも揃ってそんな頓馬なのであり，猟銃を小脇に抱え，前方の犬を追い，後方にヤマウズラの若鳥を残したまま歩き回るの

46） 原文：« Il y a des gens qui n'aiment pas la chasse, notre collaborateur Quatrelles, par exemple : il a bien tort, mais il se convertira, je l'espère [...] » (*F80*, p. 2, col. 1.)
47） 原文：« Il y a des gens qui n'aiment point les chasseurs, et peut-être n'ont-ils pas tout à fait tort. » (DHC, p. 271.)
48） Quatrelles, « Un tête-à-tête à trois. Histoire de chasse », *F80*, p. 1, col. 1-6.
49） 原文：« Je vais vous conter mon histoire ; puisse-t-elle vous servir de leçon. » (*F80*, p. 1, col. 1.)

だ[50]。

＋

猟銃と，重い弾薬入れと，それからすぐに満杯になり，おかげでますます重荷になっていく獲物袋を抱えたまま歩き回るなんて！[51]

↓

これからみなさんに私の狩りの冒険について仔細に物語り，それによって二つ目〔の悪事〕についても有罪となることにいたしましょう。／願わくば真摯かつ真正なものであるこのお話のせいで，わが同胞たちが，獲物袋を背負い，ベルトに弾薬入れを付け，猟銃を小脇に抱え，犬のあとについて野に出ていく，そんな意欲を永遠に失ってくれればいいのですが！[52]

二つのテクストの共通点を整理しておこう。まず，語り手が二人とも自分自身の物語を「これからお話しする (je vais [...] vous [ra]conter)」と宣言している点。次に，その物語が教訓として役に立ってくれればいいのだが，という希望が祈願文の構文 (puisse [...]) を用いて表明されている点。さらに，「弾薬入れ (cartouchière)」，「獲物袋 (carnier)」，「猟銃を小脇に抱え (fusil sous le bras)」といった同一の語や語句の使用。加えて――用いられている表現こそ「前方の犬を追い (un chien devant nous)」と「犬のあとについて (à la suite d'un chien)」で異なるものの――犬が前に，狩猟家が後ろにいるという主従の位置関係。

50）原文：« Nous sommes comme ça un tas de gobe-mouches qui nous promenons un fusil sous le bras, un chien devant nous, un perdreau derrière » (*F80*, p. 1, col. 1.)

51）原文：« Se promener avec un fusil, une cartouchière pesante, une [*sic*] carnier d'autant plus gênant qu'on le remplit vite [...] ! » (*F80*, p. 1, col. 1.)

52）原文：« je vais me rendre coupable du second, en vous racontant par le menu mes aventures de chasse. / Puisse ce récit, sincère et véridique, dégoûter à jamais mes semblables de s'en aller à travers champs, à la suite d'un chien, le carnier sur le dos, la cartouchière à la ceinture, le fusil sous le bras ! » (DHC, p. 271-272.)

ヴェルヌが『F80』をも言葉の狩り場として利用していた，ということを確信するのに，これらは十分な量の共通点ではないだろうか。

③狩猟への誘い

カトレルの短篇「二人乗りの馬車に三人で」も，ヴェルヌの短篇「狩りの 10 時間」も，狩猟地を所有している友人が語り手を不意に狩りへと誘うことで物語の幕が開ける。

「ラ・マトラクまでわれわれに会いに来てくれなくちゃいけないよ。解禁日に一発撃ちにおいでよ」[53)]

↓

「じゃあ，解禁日の狩りにぜひ一緒においでよ」とブレティニョは答えました[54)]。

すなわち，「物語の起動の仕方」という重要事項についてもヴェルヌはカトレルの短篇の真似をしていた可能性があるのである。

④「槊杖式の銃 (fusil à baguette)」

「狩りの 10 時間」の語り手が友人のブレティニョから借り受けた猟銃は「槊杖式の銃」，すなわち「槊杖」と呼ばれる棒を用いて弾薬を銃口から詰めこむ造りの旧式の銃だったが，これは『F80』でも密猟者の使う銃として言及されていた。

彼〔密猟者〕の銃は，古い槊杖式の軍用銃（フランゴ）だ[55)]。

53） 原文：« Il faut venir nous voir à La Matraque. Venez tirer un coup de fusil chez moi, le jour de l'ouverture. » (*F80*, p. 1, col. 1.)

54） 原文：« Eh bien, venez donc faire l'ouverture avec moi, répondit Brétignot. » (DHC, p. 274.)

↓

「一丁，貸してあげるよ――槊杖式の銃だけど，それでも 80 歩の距離から野ウサギを撃って地面に転がすことができる！」[56)]

「狩りの 10 時間」の語り手がブレティニョから「槊杖式の銃」を借りていたように，ヴェルヌもまた『F81』から「槊杖式の銃」という言葉を借りていたのかもしれない。

⑤パリのレストランと「モヴィエット (mauviette)」

『F80』にはパリの高級レストランと密猟者の癒着を指摘した一節があり，その数行後に描かれる支配人と客とのやりとりには「脂の乗ったヒバリ」を指す「モヴィエット」という語が出てくる。一方，ヴェルヌの短篇にもパリの高級レストランと「モヴィエット」の組み合わせが唐突に言及されるシーンがあり，この部分は『F80』の文章に直接的に想を得て書かれたのではないかと思われる。

密猟者の第二の共犯，それはパリの高級レストラン経営者だ。〔…〕狩猟解禁日のだいぶ前から，またずいぶん後まで，パリの高級レストランでは密猟者たちのおかげでつねにまちがいなくジビエにありつけるのである[57)]。

＋

「ウズラやニワムシクイ，モヴィエットなど〔の料理〕はあります

55）原文：« Son fusil est un vieux *flingot* à baguettes » (*F80*, p. 2, col. 4.)
56）原文：« Je vous en prêterai un, – un fusil à baguette, il est vrai, mais qui vous boule tout de même un lièvre à quatre-vingts pas ! » (DHC, p. 274.)
57）原文：« Le second complice du braconnier, c'est le grand restaurateur parisien. [...] Bien avant l'ouverture de la chasse, et longtemps après, on est toujours sûr de manger du gibier chez les grands restaurateurs parisiens, grâce aux braconniers. » (*F80*, p. 2, col. 4.)

か？」[58)]

↓

木々の梢には，最高級のレストランで小粋に串に刺され，モヴィエットという名前で出てくるあの罪なきスズメが必ず何羽かいるはずです。〔…〕スズメどもはきっとパリのレストランを警戒し，身動きせずにいたのです[59)]。

以上の5点のほかにも，『F80』にはヴェルヌの短篇への影響を疑える細部が複数ある。例えば「狩りの10時間」第10章には「憲兵 (gendarme)」が登場し，「狩猟免許 (permis de chasse)」や「調書 (procès-verbal)」が語り手にとって大きな意味を持つのだが，『F80』の2ページ目にも密猟者に関する記事（アドルフ・ラコ「密猟者」[60)]），憲兵に関する記事（「密猟者の敵」）[61)]，狩猟法に関する記事（「狩猟家のためのささやかな手引」）[62)]が掲載されているため，事の必然として，上に挙げた三つの言葉は紙面に何度となく登場する（加えて，カトレルの短篇で主役級の活躍をする犬の名前も「憲兵 (Gendarme)」であった）。

以上のように，「狩りの10時間」の発想源となり得たであろう細部は『F80』の全体を眺めてみれば決して少なくない。ヴェルヌは『F81』から遡り，『F80』も参照していたと考えてよさそうである。

58） 原文：« avez-vous des cailles, des becfigues, des mauviettes, etc. ? » (*F80*, p. 2, col. 4.)

59） 原文：« A la cime des arbres, il y aurait toujours de ces innocents moineaux que les meilleurs restaurants vous servent, coquettement embrochés, sous le nom de mauviettes. [...] Les moineaux se défiaient sans doute des restaurants parisiens, et se tenaient cois. » (DHC, p. 298-299.)

60） Adolphe Racot, « Le braconnier », *F80*, p. 2, col. 3-4.

61） [Anonyme], « Les ennemis du braconnier », *F80*, p. 2, col. 5.

62） [Anonyme], « Petit manuel du chasseur », *F80*, p. 2, col. 6.

4. 結論

本稿では「狩りの 10 時間」の作者が『フィガロ』の二つの狩猟特集号を参照し，少なからぬ語や語句をそのまま自作のテクストに取りこんでいることを示した。紹介した事例の数は，あるいは過剰と言っていいほどだったかもしれないが，そのぶんヴェルヌが先行テクストに負っている要素がきわめて多様かつ多量であったことは明らかにできたのではないかと思う。

「狩りの 10 時間」は作者の「体験談 (histoire vécue)」だと断じられることもあるが[63]——そして，そういった見方にはたしかにそれなりの根拠もあるのだが[64]——制作手法の面から言えば，これはヴェルヌが過去の経験を筆の赴くまま，感興の赴くままに書き記すといった単純なプロセスでできたものでは決してなく，〈驚異の旅〉を構成する他の多くの小説作品と同様，他者の言葉を，すなわち自身の経験の埒外にある言葉を積極的に収集し，精選し，配列し，加工し，自らの文章に組みこむことで——つまり，およそ「体験談」らしからぬ執筆過程を経たうえで——成立した，あくまでも一篇のフィクションなのである。

［謝辞］
本稿執筆にあたり，貴重なご教示をくださった立教大学の石橋正孝先生，成城大学の松澤裕樹先生に，心より感謝申し上げます。

63）例えばオリヴィエ・デュマの以下の一文。「この「小咄」は，めったに打ち明け話をすることのない作者が「青少年時代の思い出」よりも前に公衆に披露した初めての体験談である。」(Olivier Dumas, « *Dix heures en chasse*. Une histoire vécue », *Bulletin de la Société Jules Verne*, nº 149, 2004, p. 3.)

64）1897 年の年末にアミアンを訪れたアドルフ・ブリソンにヴェルヌはこう語ったという。「狩猟には嫌悪感を覚えます。一度しかやったことはないのですが，憲兵の帽子を撃ってしまって，軽罪裁判所に呼び出されました。それで，もう二度とやるまいと誓ったのです。」(Adolphe Brisson, « Promenades et visites — M. Jules Verne », *Le Temps*, 29 décembre 1897, p. 2.)